

福 竜 丸 だ よ り

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

同時代の画家、寺田政明

吉 井 忠

「巴里一九三七年」という題の作品を私は今年描いた。これは五十余年前私がパリに居た頃のモンパルナスの街頭風景だ。

その年はピカソが「ゲルニカ」を発表した年で第二次世界大戦の前夜の風景である。あれから半世紀を経た現在何故そんな昔の風景を描く気になったのかよくわからない。それは今でも私の胸に鮮明に残っている時代の記録でもあるが、現代にはそうした記憶を呼び起こす何かがあるのだろうか。

昭和の初め寺田政明、井上長三郎、鶴岡政男、巖光、松本竣介、麻生三郎等々、大正デモクラシーの空気をたっぷり吸いこんだ若者達が谷中の太平洋画会研究所にたむろしていた。そこで「芸術とは何か」「社会主義とは何か」等の議論が徹夜で行われた。戦前池袋に住んでいたそれらの若者達の群像に光を当てた記録文学、宇佐美承の「池袋モンパルナス」はその時代の空気を生々と語っている。

すっかり変わってしまった。当時そこに住んだ画家の大半はその土地を離れ、またこの世を去った。

戦前から戦後にかけて私達は寺田政明と共に画の世界を歩み、共に展覧会を主催し、旅もした。

寺田が私達の主体美術の秋季展(一九六七年)に「原爆ドーム」の大作を発表した。私達は一寸意外な感じもしたが大いに共感もした。彼も私達と同じように、どこかでこの時代を見つめていたのだなとその時思った。

原爆ドームを発表した後、彼は「第五福竜丸」を秋の主体展(一九七五年)に発表することになる。彼はいつの間にか夢の島に出かけていたのだ。

彼は北九州の生れであり、何かといえは北九州、玄海灘の話が出た。時に飲めば調子が出て唄うのが「ドント、ドントドド浪乗り越えて」の藤原節であった。

寺田は幼い頃から大小の船を見て育ったにちがいない。私のような山国育ちとちがってよく船を理解し親しみを

感じていたようだ。私等は東京に出て来るまで鉄船等見たことはない。私は今でも船を描くのが苦手だ。寺田は木の葉のような舟を描いてもちゃんと舟になっている。舟に対する理解力があるのだろう。

広島「原爆ドーム」も「第五福竜丸」も私達をうならせたし、その後の小樽運河の諸作と共に彼の代表作であると私は思っている。

ビキニの死の灰を被った久保山さんとその第五福竜丸はベン・シャーンも「ラッキー・ドラゴン」シリーズとしてそれを作品化している。

いつか京都に来たベン・シャーンに私は朝倉撰、佐藤忠良と共に会ったことがある。彼も熱心な平和主義者であった。

寺田政明も私と同時代に生れ育った大正デモクラシー派の「池袋モンパルナス」人であり、戦争体験者であった。互にぬぐい切れない同時代感覚があったようだ。どこやら油断なく見据えていた同時代人の眼を彼の作品から私は感じる。

寺田が最後の床で「たのむ」といつて握った彼の厚肉の掌の感覚が私の掌にある。

(画 家)

元第五福竜丸乗組員

高木兼重さんを悼む

高 橋 肇

「昨年の暮れ、高木さんが亡くなった」と聞きました。第五福竜丸で死の灰をあげ、核のない平和な世界を願っていた人が、また一人亡くなられたのです。

高木さんと私との出会いは五年前。私が津久見の保戸島小学校に勤務していたときでした。子ども達に、もっと深く『第五福竜丸』の学習をさせたいと願ひ、高木さんにいくどとなくお願いし、その年やっと島まで来ていただけのでした。

「昔のことなので、詳しいこと



：放射能の灰というものは、ちょっと見た時は貝がらを金づちで

は忘れましたが」と言いながら、子ども達のためにと、一生懸命マイクをもって話してくださった高木さんの姿が印象的でした。わずか一時間足らずの会でしたが、いつもはさわがしい子ども達も、この時ばかりは、大変熱心に話に聞き入っていたのを覚えています。

また、子ども達の質問にも大変わかりやすく答えて下さり、高木さんの優しい人柄がにじみ出た、すばらしい会だったと思ひ出されます。あの時、大変お元氣そうだったのに、わずか五年ほどでお亡

くなりになるなど、思ってもみませんでした。年に一度は東京まで、身体に残った放射能の検査にいかれているとは聞いていましたが、やはり、死の灰が身体の奥深くを触んでいたのでしょうか。

「しっかりと勉強をして、みんなが安心してくらせる海や世界をつくってほしい」というあの時の言葉に、高木さんの人柄と優しさを、平和を心から願う強い気持ちが表示されていたと思います。

高木さん、今ここであなたを亡くしたことは、私達にとって大きな損失です。しかし、あの時のあなたの言葉をかみしめながら、残された私達が、微力ながら「核」

島の上に搭をたて実験したんです。爆発の瞬間、島がボワーと吹きあげられて、これが放射能の灰となって船に降ってきたわけですね。降った量はどれくらいかといいますが、みなさん雪が降った時手でかき集めるでしょう。それくらいの量です。二センチか三センチくらいですね。これが全部船に積もったわけですよ。△子どもたちの質問に答える高木さん。一九八五年三月二日、保土島小学校の平和集会のビデオから採取

第五福竜丸の「工事報告書」に労働大臣賞

今年の三月発行された「第五福竜丸保存工事報告書」(文化財建造物保存技術協会編)が、八月に東京で開かれた軽印刷工業会のコンクールで労働大臣賞を受賞しました。

少量出版の学術書のための業務用印刷部門で応募作品九九点の中から選ばれた一位で権威のあるもの。印刷にあたった福島の平電子印刷はじめ編集に苦勞した保存技術協会の喜びもひとしおです。執筆の日塔和彦さんは「この賞は印刷会社に与えられるもので、執筆・編集者には残念ながら一切関係がないようです」といいながらこの機会に「報告書」が一層多くの人々に知られ普及されればうれしいと話しています。

残部僅少。申し込みは平和協会まで(送料共一万円。郵便振替口座 東京7139253)。

平和随想 (44)

三宅 泰雄



広島と長崎に原子爆弾が落とされて、今年には四十五年目にあたります。

その頃、私は中央気象台に勤務し、戦争末期には長野県の諏訪に疎開させられていました。そこは諏訪市の町外れの、大きいお寺で、私たちとともに職員約三〇名、それに気象技術員養成所(現・気象大学校)・専修科の生徒たち約二〇名が寝泊りしていました。養成所の生徒の教育には、私たちがあたりました。

原子爆弾が落とされたあと、私は当時知るかぎりの原子爆弾の原理について、養成所の生徒たちに講義を行ないました。私自身は広島の出身者であったので、広島親戚の安否を気遣っ

ていました。その心配の通り、親戚の者のうち、十人近くの人が、原子爆弾の犠牲になっていることが、しだいに分かりました。戦争の終わったのは一九四五年八月十五日でしたが、もともと反軍派であった私たちは、その日、祝杯をあげました。

私たちは、東京の混乱を心配して、疎開地から東京に戻ったのは、その翌年、一九四六年三月末のことでした。しかし、東京に帰っても、研究ができるわけでもなし、いわば、ぼんやり、暮していたのでした。

当時の中央気象台長・藤原咲平先生は、もともと、戦前から、戦争支持派の一人でしたので、敗戦後、軍関係の技術将校や技官を大量、中央気象台に引き受け、一時は膨大な職員数となりました。そのうちに、中央気象台派と、新中央気象台派に分かれ、相互間の不和で、お互いに仕事もできにくいくらいの状況にさえなりました。

しかし戦時中にできた気象官署の国営化が、軍の命令で進められ、次第に軍の力が強まって行きました。戦前までは、地方気象台や、測候所は、県のものでしたのです。

さて、戦争も原子爆弾の投下で終了はしましたが、その後始末に多大の労力を要し、それが回復するまでには、長い年月がかかりました。気象台の問題もその一つでした。

一方、第五福竜丸の被災は、原子爆弾によるものではなく、水素爆弾による初めての被災であることは、皆様はご存じのことと思います。

原子爆弾は一九四五年七月、アメリカで三個が完成され、一個は爆発試験に、あとの二個が広島、長崎に投下されました。原爆の構造は、ウランの原子核に中性子を衝撃し、原子核を二つに分裂する「核分裂」の現象を利用したものです。核分裂の際、多量の放射性物質が生成されるとともに、巨量のエネルギーが放出されます。

これに対し、水爆は「核分裂」とは反対に二つの原子核を融合させる反応を利用したもので、多量の放射線と莫大な量のエネルギーを発生します。自然界にある一ばん軽い元素は水素ですが、水素の原子核を四つくっつけあわせると、ヘリウムになります。太陽の火を

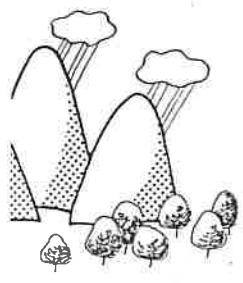
支えているのが、この核融合反応です。

アメリカは原爆より、さらに破壊力の大きい水爆の開発に取りかかりましたが、ここでも、ソ連に先を越されてしまいました。

ソ連に追い付くためにアメリカは一九五四年三月から五月まで、巨大な水爆実験を繰り返しました。その最初の実験が、いわゆるブラボー爆弾で、ビキニ事件を引き起こしました。

この水爆の爆発力は火薬TNTに換算して一五〇〇万トン以上といわれています(広島原爆の約千倍)。

原子兵器の発達は、その後、各国とも秘密にされていますが、最近、米ソが、核兵器の制限を發表しましたが、おそらく、もう古くなった兵器の数を減らしただけで、お互いの戦力は、かえって増大しているのではないのでしょうか。



マイクロネシア連邦に属するトラック島は、旧日本軍戦跡博物館として、沈められた艦船、砲台を保存しているが、マーシャルは第二次世界大戦後の核開発競争の結果として、残してはならない放射能を残されてしまった。ビキニ島に残っている水爆実験による巨大なクレーターや、実験跡地のような目に見える具休物は、おそらく消されてしまうだろう。

さらに、大陸間弾道弾の着弾点とされたクワジュリン島がある。つい最近アメリカが四年間を費やして作った映画「Home on the Range」- I'll be in the bulls' eye - を島田さん宅のビデオで見た。戦争のためのあくなき武器開発競争の犠牲者は、ビキニにしろクワジュリンにしろ、かならずそこに住む住民だ。

わずかな期間の滞在の欲張ったスケジュールだったが、日が経つ程いろいろな思いがよぎる。親切にしていたいた沢山の出会い。多勢の子供たちの笑顔。垣間見た一端を更に深く検証し、本当の海に馴じみ楽しむためにもう一度行きたい。(出版者勤務)

マーシャルを訪ねて

清水 能親



カメラマンの島田興生さんが、マーシャル諸島共和国の首都マジュロ島に移り住んで五年目の夏を迎えた今年、私たち六人は念願の訪問旅行を決意した。

サラリーマン、出版社社長、フリーライター、考古学研究者……多彩な顔ぶれがやっとやりくりした夏休みを「あこがれの南の島ですごそう」という気軽なバカンス

旅行だから、予備知識を詰め込むこともなく旅立った。

トラック、ポナペ、クワジュリン島と離着陸を繰り返して、グアムから七時間半もかかって、マジュロ空港へ着いた。途中の島々とは全く様相を異にした平坦な土地。そびえるヤシの木がヤケに高く感じられる。標高一〜三m、島の最大幅一〇〇m、最小幅一〇m、細長い小島がラグーン(内海)を囲んでいる。

夕方の海風が心地良い。真夏の東京では絶対味わえない自然がある。だが、我々には沢山あると思えた自然も、このマジュロ島では年々破壊が進んでいるらしい。マーシャル諸島共和国全人口四万人強の半分二万人が十六km²の土地に住み、二〇二五年には八万五千人にもなるという。爆発的な人口増は道にあふれた子どもで多さで実感出来た。あどけなく、くっつくの笑い顔で、ヤッコエ(こんにち)は」と声をかけてくれる子供たち。この子どもたちの親の世代は核実験の脅威にさらされた(ビキニ島はマジュロ島北方千kmの距離にある)。

近代的な設備を誇る外国人用ホ

テル、スーパー、新聞社、ラジオ局、小学校、高校、博物館、裁判所、図書館……と隅から隅まで、ありとあらゆるところを案内してもらったが、働ける場所は一体どこにあるのだろうか？

子供たちの将来は、空や海の青さとはウラハラに決して明るいものではないようだ。トラック島で降りたオジサンはグアム島へ出稼ぎに行っているといっていたが……

マジュロ島から三〇kmの離島アールノ島(写真)には自然があふれていた。道端に山と積まれたヤシの実、パンの実を焼く少女、一家そろってパンの実をむく家族、草ぶきの家、絵に描いたようなサンゴ礁。無数の色とりどりの魚。この島もいつの日かホテルが建ち舗装され、スーパーが出来るのだろうか。数十年前までは、マジュロもクワジュリンもビキニも、二九もあるアートル(環状サンゴ礁)から成るマーシャルの全島が、この島のように自然と共に生きていたことだろう。

ドイツ、日本、アメリカと一九世紀後半から、次々と支配を受けた歴史は、戦場にならなかつたが戦争を体験した……といえる。